【401】

氏　名（本籍）	長谷川（はせがわ）　由美子（ゆみこ）（東 京 都）
学 位 の 種 類	博　　士（学　　術）
学 位 記 番 号	博　甲　第　6276　号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	図書館情報メディア研究科
学 位 論 文 題 目	**明治期唱歌集における西洋曲の研究**

主　　査	筑波大学教授	綿 抜 豊 昭
副　　査	筑波大学教授	松 本 浩 一
副　　査	筑波大学教授	松 縄 正 登
副　　査	筑波大学教授	西 岡 貞 一
副　　査	東京大学教授	渡 辺　　裕

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は明治期唱歌集掲載の西洋曲についての日本での受容を明らかにすることを目的とする。

研究方法については、まず基礎資料となる明治期に出版された「唱歌集」を調査し、現存数とその内容について明らかにする。次にそれらの内容等を分析し、「文部省買入楽譜」といった西洋曲資料との関連について考察することなどによって、西洋曲が、どのように日本に入り、どのように明治期唱歌集に収録されて流布し、どのように展開したかについて考察を加え、西洋曲の日本での受容について明らかにする。

第 1 章は、研究目的、先行研究、研究対象と用語の定義、本論文に多用された数値算出の基本姿勢について述べる。

第 2 章は、「明治期に出版された楽譜付き唱歌集と西洋曲掲載唱歌集」をとりあげている。明治期の楽譜集と西洋曲掲載唱歌集の出版点数を調査し、日清戦争、日露戦争時に、楽譜集は急激に増加するにもかかわらず、西洋曲掲載唱歌集の出版点数はほとんど変化しないことを明らかにした。

また、明治期の記譜について調査し、

①西洋曲掲載唱歌集では五線譜と数字譜が占める割合が大きく、数字付五線譜はほとんど用いられなかったこと。

②記譜と出版地、それに初出の旋律の関係については、多くの初出旋律を持つ唱歌集の大多数の記譜は五線譜であること。

③五線譜の多くは大都市である東京と大阪に集中していること。

④地方の出版物は数字譜が多いこと。

以上の 4 点を明らかにした。

第 3 章は、西洋曲掲載唱歌集の出典となった楽譜、具体的には、国立国会図書館所蔵の「文部省買入楽譜」（全 40 タイトル 66 冊）、「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」（全 23 タイトル、32 冊）を調査し、それに明治期唱歌集にみられる曲が、何曲含まれ、その曲は何かを明らかにした。

また、「文部省買入楽譜」と「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」の調査の結果、讃美歌集と重複する曲が多

いことが判明したため、ここで讃美歌と唱歌の関係について考察を加え、楽譜の照合の結果、讃美歌と同じ旋律を持つ唱歌は全旋律の約10%であることを明らかにした。

さらに洋楽を導入した軍楽隊が使用した楽譜である「警視庁音楽隊所蔵旧陸軍軍楽隊楽譜」を調査し、このなかから3曲が明治期唱歌集に使われたことを明らかにした。

第4章は、第3章でとりあげた「文部省買入楽譜」「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」と明治期唱歌集の関係についてとりあげている。

明治期唱歌集にみられる旋律で、「文部省買入楽譜」「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」に共通するものは55%である。「文部省買入楽譜」からはドイツ語圏のものが、「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」からは英語圏のものが多くとられていることを明らかにした。

また、多くの歌詞で変遷した曲ほどこれらの楽譜群の旋律を使用していることも明らかにした。

第5章では、日本での受容を3部に分けて述べている。

第1部は、「6以上の異なる歌詞で変遷した旋律による唱歌」、第2部は「明治期唱歌集の西洋曲に見られる特徴」、第3部は「唱歌集の編集者と出版社」である。

第1部の「6以上の異なる歌詞で変遷した旋律による唱歌」では、旋律は同じながら歌詞は異なるという唱歌を調査し、どのような旋律が複数の歌詞が付けられ流布したかについて明らかにした。

第2部は、「明治期唱歌集の西洋曲に見られる特徴」を項目ごとに論じている。

「作曲者、あるいは曲の属性表示の変遷」では、作曲者表示や曲の出典に対する何らかの情報表示は、明治25年の伊澤修二編集の『小學唱歌』（東京、大日本圖書）が最初で、明治33年までは散発的なものであったが、明治33年以降一般的になったことを明らかにした。

「作曲者表示の誤謬」では、作曲者名が間違っているとき、それは日本で間違った場合と、日本に入る前、すなわち明治期唱歌集が参考にした「欧米唱歌集」が間違っている場合のふたつがあることを明らかにした。

「原曲の登場」では、明治期唱歌集に掲載される原曲の状況をみるために、掲載頻度の高いモーツァルトの曲を中心に調査し、原曲が明治36年以降、増えていくことを明らかにした。さらに雑誌の広告や編集者の序文、雑誌の投書欄等から原曲の登場を促進した背景に輸入楽譜の存在があったことを明らかにした。

「時代を映した唱歌－軍歌と唱歌」では、内容の検討を加えた結果、日清、日露戦争時には「軍歌」が多く唱歌集に掲載されたことを明らかにした。また、日清戦争時は曲集のタイトルに「軍歌」が含まれる出版物だったのに対し、日露戦争時には個々の曲は一般の唱歌集に分散して現れることを明らかにした。また、日本の唱歌に現れた「軍歌」は、その旋律がよく知られた曲が多いこと、日露戦争後にロシア民謡が唱歌集に取り上げられるようになったことを明らかにした。

第3部は、「唱歌集の編集者と出版」では、西洋曲を多く掲載した唱歌集とその編集者、出版元を調査し、それまで多くの出版社で出版されていたが、明治33年を境にして、楽譜を主に扱う出版社と東京の大手出版社に集中することを明らかにした。また、編集者たちは音楽取調掛と東京音楽学校関係者が大半を占めたことを明らかにした。

以上のように、本研究によって、これまで不明であった明治時代の「唱歌集」を出版形態等、それに採録された西洋曲の出典、また、内容の特色、流布の状況などについて明らかになり、明治期唱歌集に収録された西洋曲が、日本でどのように受容されたかが判明した。

審査の結果の要旨

本論文は、明治期に出版された「歌詞の付いた出版物」（本論文では「唱歌集」と称す）は、どのようなものがあるかを調査し、その全体数を明らかにし、さらにそのすべての内容を分析し、西洋曲が含まれた出

版物、掲載された西洋曲数などを明らかにしている。次に、それらがどのような経路を経て日本にもたらされたかを考察し、また、「旋律」等を調査することによって、原曲に、どのような形で手が加えられて、さまざまなテキストが生み出されていくかを明らかにしている。

日本の音楽において西洋曲は重要な位置を占めるにもかかわらず、それが日本にもたらされ、普及していく明治期の西洋曲受容については明らかにされていなかった。その意味で、本研究はその実態を明らかにするものであり、有意義な研究である。

研究方法は、唱歌集掲載の西洋曲を出版物単位と曲単位で調査するという文献調査であり、その調査結果として、西洋曲を掲載した出版物は363タイトル、曲の総数は5098曲、歌詞単位で数えた西洋曲は2632曲、旋律単位では1669旋律と、その実数を明らかにし、このデータから歌詞単位による初出を明らかにし、旋律のグループ化によって、一つの旋律に付けられた歌詞数や、讃美歌や器楽曲における使用を明らかにし、さらに旋律としての初出も明らかにしている点は評価にあたいする。

第1章は、研究目的、先行研究、研究対象と用語の定義、本論に多用された数値算出の基本姿勢について述べている。特に問題となる点はない。

第2章は、「明治期に出版された楽譜付き唱歌集と西洋曲掲載唱歌集」をとりあげている。西洋曲掲載唱歌集の特徴を、その他の唱歌集と比較することによって論じ、さらに歴史的な経過の中で、出版点数、掲載曲数、記譜の観点から明らかにされた西洋曲掲載唱歌集の特徴については説得力がある。

第3章は、「西洋曲掲載唱歌集の出典となった楽譜」をとりあげている。

西洋曲掲載唱歌集の出典となった楽譜は、

①国会図書館所蔵の「文部省買入楽譜」40タイトル66冊、

②「文部省買入楽譜」以外の楽譜23タイトル32冊、

③讃美歌、

④「警視庁音楽隊所蔵旧陸軍軍楽隊楽譜」

である事を明らかにしている。

また、讃美歌と唱歌の結びつきを、旋律の比較によって、全旋律中72旋律が讃美歌集掲載楽譜と同一であることを明らかにしている。実数が明らかになった点が評価できる。

第4章は、外国唱歌集からの移入曲が明治期唱歌集に占める割合とその影響をとりあげている。

「文部省買入楽譜」と同じ旋律を持つ明治期唱歌集の割合は約30%である。「文部省買入楽譜」が多くのドイツ語圏の音楽を多く含み、それが明治期唱歌集にも多く掲載されたことを明らかにしている。英語圏の歌の多くは「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」に旋律があることを明らかにしている。

以上の結果から、合計55%の旋律が「文部省買入楽譜」と「「文部省買入楽譜」以外の楽譜」である「欧米唱歌集」中に掲載され、さらに、多くの歌詞で変遷した曲ほどこれらの楽譜群の旋律を使用していることも明らかにしている。また、欧米唱歌集が曲の選択に影響を及ぼしていることを、例を挙げて明らかにしている。実態が明らかになった点が評価される。

第5章では、日本での展開を3部に分けて述べている。

第1部は「6以上の異なる歌詞で変遷した旋律による唱歌」、第2部は「明治期唱歌集の西洋曲に見られる特徴」、第3部は「唱歌集の編集者と出版社」である。

従来の明治期の日本の音楽についての研究では、有名な作曲家に関する研究が中心であり、明治期の関連出版物を可能な限り調査して、全体の傾向等を視野にいれ、いわば「音楽テキスト」の諸本についての研究がなされることはなかった。その点、本論文は新たな知見を与え、学会に寄与する点がきわめて多大なものがある。

以上述べてきたようにすぐれた研究ではあるが、今後の課題がないわけではない。

各地の図書館や資料館には、当然ながらOPACでは検索できない資料が存在している可能性がある。これらの調査の必要がある。

また、明治期中に入ってきた欧米唱歌集の調査にあたっては、国内に所蔵されるものだけではなく、外国の図書館に所蔵が確認できる資料を調べる必要があるだろう。さらにはインターネット上に公開された全文検索できる外国唱歌集をさらに調べる必要があるだろう。

完全にすべてのものを調査することはできないにしても、地道に調査を重ねることによって出典不明な曲の数が減少していくことは疑いない。

本研究は、研究対象の時期を明治期に限っているが、「日本の音楽資料」（文化庁委託事業「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」）では、2011年度の事業として明治期から昭和20年までに出版された日本における楽譜の所在目録を作成し、公開する予定なので、そのデータベースを利用して、大正期については調査し、そのうえで明治期の見直しが必要であろう。

以上のような今後の課題は残っているものの、明治期出版唱歌集に掲載された西洋曲のデータ収集と分析によって、「欧米唱歌集」の存在とその影響力、日本における旋律の伝播について明らかにした本研究は、新しい知見を導き出した、すぐれた研究といえる。

平成23年12月20日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程の学位論文の審査に関する内規」第12項第2号に基づく最終試験を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。